

第五章・チャクダラの救援

前章で説明した出来事が世界のすべての地域で関心と注意を払って見られている間、それは総督評議会において気がかりな協議の対象となっていた。総督自身が必然的にアフガニスタン国境の部族とのより切迫したより複雑な関係をもたらす大規模な軍事作戦の可能性を嫌悪することは当然であった。彼は母国において平穏と節約の政策に情熱的に、いたずらに、そしてしばしば無分別に固執した政党に属していた。すべての経済状況が軍事的行動に乗り出すことに対する彼の嫌悪の後ろ盾となっていた。これほどふさわしくない瞬間は他になかった…これほど気が進まない人物は他にいなかった。エルギン卿（*一八四九年生、自由党）の総督府と飢饉の年（*一八九六〜一八九七年）は、最大の辺境戦争の年として大英帝国領インドの歴史に刻まれることになったのであるが、いかに彼の動機が熱烈であったとしても、いかにその権限が強大であったとしても、いかに一個人が実際に国家的事件の進路をコントロールすることができないかということを示している。

評議会はこのたちまち辺境政策に最も広範かつ複雑な問題を引き起こし／多大な費用を伴い／彼らが管理する大きな人口の発展と進歩に大きな影響を与える可能性がある事態について決定を下すことを求められた。そのような問題は細部をその重要度によって適切に整理し／過去を吟味し、未来を予測するために／最も高遠な、見通しの利く観点から検討することが望ましいであろう。それでも状況全体をこのように見ようとした人々は何千人もの獐猛な襲撃者に囲まれ、小銃射撃の白煙に巻かれ、弾痕のついたチャクダラの岩の様子にすぐに直面させられた。守備隊は見捨てられないことを固く信じて命がけて戦っていた。これ以上傍観することは不可能であった。すべての政府、すべての為政者は同じ困難に直面する。原則、政策、経過、経済に関する幅広い検討事項は性急な緊急事態の際には脇に追いやられてしまう。決断は即座に為されなければならない。政治家は出来事に対処する必要がある。単にそれらを記録するだけの歴史家は、成功した日和見主義の例を持ち出して自らの方策を組み立て、暇を楽しむかも知れない。

七月三〇日に次の命令が公式に発表された。「評議会の総督は、マラカンドと近接する駐屯地を守り、必要に応じて近隣の部族に対して軍事行動をとる目的で軍を派遣してマラカンド野戦軍と称することを裁可する。」

部隊は次のように構成された…

第一旅団

指揮―W・H・メイクレジョン大佐、バス勲章コンパニオン、聖マイケル・聖ジ

ヨーシ勲章、地位は現地准将

- 第一大隊王立西ケント連隊
- 第二四パンジャブ歩兵隊
- 第三一パンジャブ歩兵隊
- 第四五(ラトレイ)シーク隊
- 第一英国野戦病院のセクションAおよびB
- 第三八現地野戦病院。
- 第五〇現地野戦病院のセクションAおよびB

第二旅団

指揮―准将P. D. ジェフリーズ、バス勲章コンパニオン

- 第一大隊 東ケント連隊(バフ隊)
- 第三五シーク隊
- 第三八ドグラ隊
- ガイド歩兵隊
- 第一英国野戦病院のセクションCおよびD
- 第三七現地野戦病院
- 第五〇現地野戦病院のセクションCおよびD

師団

- 四個戦隊、第一一ベンガル槍騎兵隊
- 一個戦隊、第一一ベンガル槍騎兵隊
- 二個戦隊、ガイド騎兵隊
- 第二二パンジャブ歩兵隊
- 二個中隊、第二二パンジャブ歩兵隊
- 第一〇野戦中隊
- 六砲、第一英国山岳砲兵中隊
- 六砲、第七英国山岳砲兵中隊
- 六砲、第八ベンガル山岳砲兵中隊
- 第五中隊マドラス工兵隊
- 第三中隊ボンベイ工兵隊
- 第一三英国野戦病院のセクションB
- 第三五現地野戦病院のセクションAおよびB

連絡線

第三四現地野戦病院。

第一現地野戦病院のセクションB

「この師団は全体で六八〇〇の銃剣、七〇〇の槍やサーベル、二四の砲を利用できる野戦兵力となった。」

この強力な部隊の指揮権は現地少将の地位を付与されたバス勲章ナイト・コマンドーのビンドン・ブラッド准将に委ねられた。

この将校は私が語るべき物語の主人公なので、彼を読者に紹介するための余談が必要である。ビンドン・ブラッド卿は今や彼がその一族の長であるアイルランド西部に三〇〇年間続くアイルランド人の古い家系に生まれ、私立校とアディスコムのインド軍事大学で教育を受け、一八六〇年一月王立工兵隊の将校に任官した。最初の一年間彼はイギリスに駐留していたが一八七一年に初めてインドに赴任し、そこでジャワキ・アフリディ遠征において最初の従軍を経験した。(クラスプ(*功績の内容が刻まれた留め金)付きメダル)一八七八年に彼は帰国したが、翌年はズールー戦争従軍を命じられた。数々の戦闘の結果、二度目のメダルとクラスプを獲得することになった。そして再びインドに向けて出航し、一八八〇年のアフガニスタン戦争を通して服務し、しばらくカプールの部隊に所属していた。一八八二年には陸軍とともにエジプトに同行し、テル・エル・ケビールで最も激しく交戦したハイランド旅団と一緒だった。メダルとクラスプ、ケディブの星、メジディー三等勲章を受け取った。(※二つはオスマン帝国の勲章)戦役の後、二年間帰国し、一八八五年にロシアの戦雲がかかっていた東方へと海を渡った。それ以来、將軍はインドで、最初は自らが再編成に密接に関わった工兵隊で服務し、後にアグラ地区の指揮を執った。一八九五年、チトラル遠征においてロバート・ロウ卿の幕僚長に任命され、マラカンド峠の強襲を含むすべての行動に参画した。この功績によりバス軍事勲章の爵位とチトラル・メダルとクラスプを受け取った。そして彼は今、辺境の最高指揮官にふさわしい人物として初めて注目されたのであった。一八九七年の大蜂起勃発のこの時に。

三七年にわたる軍務、多くの土地での戦争、あらゆる種類のスポーツによってその筋肉と神経は鋼のように鍛えられていた。ビンドン・ブラッド卿自身は時の流れによって(*年齢によって)警告を受けるまで見事なポロ選手であり、その素晴らしいゲームが兵士に与える利点を認識している陸軍の高級将校の一人であった。彼は様々なジャングルであらゆる種類の野生動物を追い求め、槍で多くのブタを仕留め、三〇頭のトラを含むあらゆる種類のインドの獲物を自分のライフルで撃った。

騎兵中尉である私にとって、この戦地で服務する名誉を与えてくれた司令官に対して、称賛こそすれ、批判を申し立てることは適切ではないであろう。私は、將軍は帝国の責任と危険が生み出した、元老院とローマの人々が世界のすべての地域に執政官を送った日以

来、おそらくイギリス以外のどの国も所有していないタイプの兵士、行政官の一人である、と言うことに甘んじようと思う。

ビンドン・ブラッド卿は七月二八日夕方にアグラに居た。マラカンド野戦軍の司令官に任命するのですぐに赴任して着任するように、という指示の電報がインドの軍務局長からあった。彼は直ちに出發し、三一日に正式にノウシエラで指揮を執った。部隊の前進の手筈を整えるため、マルダンで停止した。ここで彼は八月一日午前三時に陸軍本部からの電報を受け取った。チャクダラ要塞が強く圧迫されているという通知と、マラカンドへ急行し、いかなる代償を払ってでもその救助を試みるように、という指示であった。大勢の敵、また弾薬と物資の不足に守備隊は苦しみ、任務は難しく緊急性が高くなっていた。実際に私が聞いたところでは、八月一日のシムラではチャクダラは命運が尽きており、救援の血路を開くのに十分な軍隊が集まるまで保たないのではないかと懸念されていた。最も大きな不安が拡がっていた。ビンドン・ブラッド卿は電報に「立場は分かっている」とし、「穏やかに自信を持っている。」と答えた。彼は直ちに急ぎ、地域の混乱のただ中に八月一日正午頃マラカンドに到着した。

チャクダラの守備隊の絶望的な立場はマラカンドの友軍によって完全に認識されていた。三一日の夜は比較的静かだったので、メイクレジョン准将は翌日彼らの救援を強行しようとした。それゆえ以下のように部隊を編成した……

第四五シーク隊

第二四パンジャブ歩兵隊

第五中隊 工兵隊

第八山岳砲兵中隊の四門の砲

准将は午前一一時にアダムズ中佐指揮下にガイド隊の騎兵隊を送り出した。アマンダラ峠へ疾駆し、もしそれが占拠されていないのであれば奪取するためである。三個戦隊が北キャンプに向かう短い道から出發した。それを見るやいなや大勢の敵が前進を阻止しようとして集まって来た。地面の状態は騎兵隊にとって最も不都合であった。表面には大きな岩が散らばっていた。頻繁にヌラーが平野を横切り、騎手の行動を束縛した。戦隊はすぐに激しい交戦状態に入った。ガイド隊は何度か突撃した。凸凹の地面は敵に有利であった。しかしその多くが貫かれ、切り倒された。この突撃の際にキーズ中尉が負傷した。彼が一人の部族民を攻撃している間に、後ろから現われた別の部族民が肩に剣で重い打撃を加えたのである。これらスワット族の剣は剃刀のように鋭利であり、また打撃は将校の腕を数日間役に立たなくするほどに痛烈なものであったが、むちで打たれた跡のようなわずかなミズばれを引き起こしただけで済んだ。それは不思議でほとんど説明不可能な危機回避で

あった。

敵の数が増加して深刻に巻き込まれ始めた騎兵隊に圧力を加えた。部族民は最大の大胆さと決意を示した。結局、アダムズ中佐は退却を命じなければならなかった。それは尚早ではなかった。部族民がすでに左側面で活動しており、それにより唯一の退却路を脅かしていた。騎兵隊は後退し、下馬して銃火でお互いを守った。キャンプ到着の際に第二四パインジャブ歩兵隊が側面を保護した。騎兵隊の損失は以下のとおり――

イギリス軍將校

重傷―G・M・ボールドウィン大尉、ガイド隊

軽傷―C・V・キーズ中尉、ガイド隊

現地兵

	死亡	負傷
第一一ベンガル騎兵隊……	〇	三
馬……	一	四
ガイド騎兵隊……	一	一〇
馬……	三	一八
死傷者の合計―	兵士一六と馬二六	

騎兵隊が遭遇した激しい抵抗、および敵が示した大人数と自信は、その日のうちにチャクダラを救うという考えを事実上終焉させた。部族民は一時的な成功に大いに高揚していた。反比例して絶え間ない緊張によって精神的にも肉体的にも擦り切れ、疲れた守備隊は士気が下がっていた。誰もが翌日のすさまじい戦いを予想していた。あらゆる危険に彼らは挑まなければならぬ。しかし「決死の行動」や「最後のチャンス」について語る者は不足していなかった。睡眠と休息の不足がすべての兵士に堪えていた。一週間もの間、彼らは獐猛な敵と格闘していた。勝利者ではあったが、息を切らしていた。

ピンドン・ブラッド卿が着任し、指揮を執ったのはこの時だった。彼はメイクレジョン将軍が次の日にチャクダラの救援に動くため、すべての兵科から一軍を組織することに忙殺されているのを見た。マラカンド基地から部隊を引きはがすことは危険であったため、この部隊は一〇〇丁のライフル、使用可能な騎兵隊、四門の砲を超えることはできなかった。この配置をピンドン・ブラッド卿は承認した。彼はメイクレジョン准将をマラカンド基地の責任から解放し、救援部隊の指揮権を与えた。そしてその後リード大佐がマラカンドの指揮官に任命され、キャッスル・ロックの哨兵線を可能な限り強化し、その中から軍勢を出してグレーデッド・ロードの右側の高地を掃討する準備を整えるよう指示された。

救援隊は以下のように編成された…

ライフル四〇〇丁、第二四パンジャブ歩兵隊

ライフル四〇〇丁、第四五シーク隊

ライフル二〇〇丁、ガイド歩兵隊

二個戦隊、第一一ベンガル騎兵隊（R. B. アダムズ中佐指揮下）

二個戦隊、ガイド騎兵隊

砲四門、第八山岳砲兵中隊

工兵五〇人、第五中隊

病院分遣隊

ビンドン・ブラッド卿は、メイクレジョン將軍に暗くなる前にキャンプの中心近くの「グレットナ・グリーン（*イングランドとの境界に接するスコットランドの町の名、親に反対された二一歳未満のイングランドのカップルはここで結婚した）」と呼ばれる小さな森にこの軍勢を集めるよう命じた。そしてそこで夜のビバークをし、朝の最初の光とともに出発できるように準備するよう命令した。午後、敵は午前中の騎兵隊に対する成功に勇気づけられて大胆に哨兵線まで前進してきた。銃撃は継続的であった。実際、それは夜の一時から一二時の間に非常に激しくなったため、「グレットナ・グリーン」の部隊は戦闘準備をした。しかし、朝にかけて部族民は退却した。

読者は多分、マラカンドが縁にギザギザの欠け目がある大きなカップであるという説明を覚えているであろう。このリムの多くは、まだ敵によって保持されていた。カップから抜け出そうとする部隊は、両側の高所から見渡されている欠け目を通る狭い道路を切り抜ける必要があった。かなり長い距離に渡って広く展開することは不可能であった。そこに將軍が今行うべき作戦の難しさがあった。マクレー大佐がブッディスト・ロードで部族民の最初の攻撃を阻止したように、救援部隊が停止させられる危険があった。八月一日、騎兵隊は北キャンプへの道を下り、かなりの迂回を行うことでこの困難を回避しようとした。しかし、これによって彼らは悪い路面に入り込んでしまい、退却する羽目になった。もし「グレーデッド」ロードが通行可能であれば、それはチャクダラ救援の道であった。もつれた、険しい土地の性質を見るに、多くの頂上と地点の中でその中の一つが他のものより重要である、ということとは素人目には異常に映るかもしれない。しかしそれはその通りなのである。マクレー大佐と第四五シーク隊がしっかりと守っている陣地の前の高所には突出した支脈があった。これが門を開き、内部に閉じ込められている部隊を解放する鍵であった。後に誰もがこれがどれほど明白なことであったかを理解し、なぜ自分たちが以前それを考えなかったのかと思った。ビンドン・ブラッド卿はそこを最初の攻撃目標として選択した。そしてゴールドニー大佐と約三〇〇人の兵士に自分が合図したらすぐにそこへ前進

するよう指示した。

八月二日の午前四時半に、彼は「グレットナ・グリーン」に赴き、救援部隊が整列し、夜明けに進軍する準備ができているのを見た。全員が厳しい行動を予測していた。疲労と不眠に悩まされ、多くの兵士が成功を疑っていた。しかし、疲れていても彼らは心を決め、命懸けの闘いに向かって奮起した。最高司令官は彼が言った通り自信を持って穏やかであった。さまざまな指揮官を呼び寄せて計画を説明し、全員と握手した。厳しく決然たるひとときであった。夜明けの最初のかすかな光が東の空にゆっくりと伸びてきた。星の輝きが淡くなった。山の後ろには太陽のきざしがあった。そのとき前進の命令が出た。すぐに救援部隊は出発し四段の深い「グレーデッド（*段のある）」ロードを降りていった。同時にゴールドニー大佐は第三五シーク隊の二五〇人と第三八ドグラ隊の五〇人とともに、今では彼の名がついている支脈を攻撃するために前進した。彼らは部族民が頂上に建てた石のシェルターに向かって静かに移動し、気付かれることなく一〇〇ヤード以内に到達した。敵は驚き、ちぐはぐで効果のない発砲をした。シーク隊は叫びつつ前方に突進した。なんの損失も被ることなく尾根は獲得された。地上に七人の死者と一人の捕虜を残して敵は無秩序に逃げた。

そのとき、作戦行動のすべての意味が敵と味方に等しく明らかになった。いま獲得されたこの地点からは、北キャンプへの道との合流点までの「グレーデッド」ロード全体を見渡すことができた。道を降りて行く救援部隊は損失や遅延なしに展開できるようになった。ドアが開いた。敵はこの機動作戦に完全に驚き、啞然として最大の混乱の中、あちらこちらを駆け廻っているのが見られた。ビンドン・ブラッド卿のディスプレイの生々しい言葉を借りるなら「アリ塚をかき乱されたアリのように。」やがて彼らは状況を認識したと見えて高地から降り、メイクレジヨン將軍の前方のベッドフォード・ヒル近くの位置に陣取り、近距離から激しい銃火を放った。しかし部隊はすでに展開されており、持ちこたえるため的人数を移動させることが可能だった。彼らは発砲で時間を無駄にすることなく、銃剣で前進した。ガイド隊の先進中隊は前方の丘を急襲し、二人が死亡、六人が負傷した。残りの部隊の突撃において損害はさらに少なかった。完全にパニックに襲われた敵は文字通り何千人も高台に沿って右側へ逃げ始めた。後には七〇人の死者が残されていた。軍勢は疲労と苦しみの記憶に逆上し、勝利の衝動に触発されて無慈悲な血気で彼らを追撃した。

ビンドン・ブラッド卿はスタッフとともにキャッスル・ロックに登り作戦全体を監督した。この位置からは戦野全体が見えた。あらゆる側面から、そしてあらゆる岩から、総崩れで敗走する敵の白い姿が見えた。道は開かれた。通路はこじ開けられた。チャクダラは助かった。偉大で輝かしい成功が成し遂げられた。ぞくぞくする歓喜が全員を身悶えさせた。その瞬間、自らの作戦が勝利するのを見た將軍は地上の人間が経験する感情の中で最

も素晴らしいものを経験したに違いない。その瞬間、ルーチンワークの退屈な年月、階級の低い兵士の長い坂上り、無能な者への常の従属、五回の戦闘の疲労と危険が報われた、と私たちは想像するかもしれない。おそらくそれは状況に反しており、回想を楽しむ時間などなかった。勝利が得られた。それによる利益を獲得しなければならぬ。敵は平野を横切って退却することを強いられる。ついに騎兵隊にチャンスが来た。四個戦隊は現場へと急いだ。

平原に向かって整列した第一一ベンガル槍騎兵隊は、溪谷目がけて容赦なく追撃し始めた。ガイド隊はアマンダラ峠を奪ってチャクダラを解放するために急いだ。すべての田んぼと岩の間で強力な騎兵たちは逃げる敵を倒した。いかなる慈悲も求められず、与えられず、すべての部族民は直ちに捕えられ、槍で突かれるか切り倒された。輝く緑の水田が黒と緑のまだらになっている戦野のあちこちに、その死体は密に撒き散らされていた。それは恐ろしく、スワットとバジャウルの住民が決して忘れることのない教訓であった。それ以来彼らの槍騎兵隊への恐怖は並外れたものになった。百人もの勇猛な未開人を慌てふためかせて丘に追いやりたり、何時間も平地に降りてこないようにしたりするには、数人のスワール（*インド騎兵）で十分なことがよくあった。

その間、歩兵隊は迅速に前進していた。第四五シーク隊はアマンダラ峠近くの、敵が必死に守る要塞化されたバトヘラ村を襲撃した。村に最初に入ったのはソーヤー大佐の到着により連隊の指揮から解放されたマクレー中佐だった。バトヘラだけで八十人の敵が銃剣の餌食になった。それは恐ろしい報いであった。

私はこの大虐殺のシーンをもう終えたいと切望している。戦いの流血を身動きせずに見つめる観客は実際に自分自身のこととして、自らがすべてのためらいを投げ捨て、その時の衝動に押し流されて、文明がその上に不確かな厚さのベールを投げかけているに過ぎない心の奥底のすべての残忍な本能に溺れる追撃の恐怖から目を逸らしてはならない。

チャクダラの救援における犠牲者は次のとおり――

	死亡	負傷
第一一ベンガル槍騎兵隊――	死亡と負傷による死亡	三／負傷 三
ガイド歩兵隊……………	二	七
第三五シーク隊……………	二	三
第四五シーク隊……………	〇	七
第二四パンジャブ歩兵隊……………	〇	五

チャクダラの救援のニュースは、インド全土に深い感謝の気持ちで受け取られた。そしてイングランドでは下院で国務大臣が電報を読み上げたとき、歓声を上げなかったメンバーは少数であった。それらの少数には注意を払う必要もない。